

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520465

研究課題名（和文）国際間ヴァーチャル教室活動を取り入れた院生教育
- 多文化・多言語意識開発に向けて -

研究課題名（英文）Movie-based virtual classroom activities involving postgraduate students in Japan and overseas institutions: Fostering multicultural/multilingual awareness

研究代表者

宮副ウオン 裕子（MIYAZOE-WONG YUKO）

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：90424093

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、ヴァーチャル映画討論会の参加者の多文化・多言語意識を「言語の社会化」の観点から分析・考察することである。下記の4点が主な結果である。

- 1) 活動の理論的枠組みと協働的学習活動設計の有効性が検証された。
- 2) これまでのCMC活動の問題点を5つの新たな方法により改善した。
- 3) 「言語の社会化」の視座からCMCの実際使用実態を明らかにした。
- 4) 参加者の多文化・多言語意識に変容が見られた。

研究成果の概要（英文）：

The study reports on a movie-based virtual discussion in the years between 2007 and 2009, which involves nearly 70 postgraduate students in Japan and abroad. It aims to investigate from the perspectives of language socialization theory how the participants promote their multicultural/multilingual awareness through participation. The main findings of the analysis are as follow:

- 1) The theoretical framework and activities consisting of a series of collaborative tasks are effective;
- 2) Five new methods adopted in the study solved/improved various issues reported in previous studies on CMC (computer-mediated communication) activities;
- 3) Language socialization theory sheds a new light on the analysis of how CMC actually takes place among participants;
- 4) The participants are more aware of the importance of being multicultural/multilingual.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：異文化コミュニケーション、言語の社会化、多文化・多言語意識、アイデンティティ、ヴァーチャル教室、映画討論会、メディア・リテラシー

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降の情報化に伴い、今日の対人コミュニケーションの様相は複雑化、多様化している。ネットワーク時代の今日、未知の人々がヴァーチャル上で交信する機会は日常化し、言語使用の場が多様化するにつれて、言語の学習・教育のニーズも変化している(Kramersch & Thorne 2002; Lam 2000, 2004, 2006; Lam & Kramersch 2003; 宮副・吉村 2005; 宮副 2009; 吉村・宮副 2009)。人々は、個人としても職業人としても、適切な IT リテラシー、異文化リテラシー、メディア・リテラシーなどの複数のリテラシーを身につけ、生涯を通して絶えず柔軟に学び続けていくことが期待されている。

本研究は「言語の社会化 (language socialization)」理論を応用し設計した「国際間ヴァーチャル教室活動」の実践に基づく研究である。参加者は国内外の複数の大学で学ぶ 100 名前後の院生で、日本語スピーチ・コミュニティーのメンバーとして位置づけられ、その属性は多岐にわたる。例えば、居住場所 (日本か海外か)、言語 (日本語母語話者 (JNS)、日本語非母語話者 (JNNS)、二 (多) 言語話者・)、職業・身分 (日本の大学在学中の留学生、海外で日本語を使い仕事をする上級日本語話者、日本語母語話者日本語教師 (JNT)、日本語非母語話者日本語教師 (JNNT)・) などである。

参加者は指定された映画を鑑賞後、日本語をリンガ・フランカ (lingua franca) としてヴァーチャル教室で映画討論を行う。運営

方法は参加者全員をメーリングリンクで繋ぎ、メール交換およびテレビ会議システム (またはスカイプ会議) を通して行う。

2. 研究の目的

本研究は参加者の多文化・多言語意識の変容を「言語の社会化」の観点から捉えることを主な目的としている。ヴァーチャル映画討論会の参加者の言語使用と CMC データの分析により、次の 4 つの研究課題を明らかにする。

- (1) ヴァーチャル教室における参加者は、映画批評をメールで交換する過程で、未知の参加者にどのように自己開示をし、「言語の社会化」を行うのか。
- (2) リソースとしての映画の有効性、IT 利用のブレンディド・ラーニング (以下 BL) の有効性、協働学習活動の設計とその基礎となる理論的枠組みの検証を行う。
- (3) 参加者はどのような複数のリテラシー (IT リテラシー、メディア・リテラシー、異文化リテラシーなど) を使いながら、課題の達成を行っているのか。
- (4) 参加者の多文化・多言語意識はどのように変容し、開発されるのか。言語の使用・学習・教育にかかわるビリーフはどのように変容するのか。

3. 研究の方法

- (1) 過去 3 回の活動実践の検証：活動を構成する協働学習活動は次の 6 つのタスクにより構成される。①指定された複数の映画から一編を鑑賞し、映画別に参加者メ

ーリングリストを構成、②自己紹介メールの交換、③メールによる映画批評の交換（文字言語）、④テレビ会議またはスカイプ会議による映画批評の交換（映像・音声言語）、⑤本活動に関連した課題の作成、⑥活動評価アンケートとインタビュー。

- (2) 分析対象のデータ：①参加者が交信した複数の CMC データ（Computer-mediated communication、電子メール、テレビ会議、スカイプ会議資料など）、②参加者を対象とした活動後の評価アンケートとインタビュー、③参加者が執筆した内省レポートなど。
- (3) 分析方法：「言語の社会化」理論を援用した内容分析。

4. 研究成果

考察と分析の結果、次のことが明らかになった。

- (1) ネットワーク社会の出現による言語使用のニーズに対応する協働的な学習活動の設計の有効性、長期的な教育実践を通して理論的枠組みの有効性が検証された。
- (2) 先行研究で指摘された IT 利用活動の問題点（Kramsch & Thorne 2002; Ware & Kramsch 2005; 板倉・中島 2003 など）が、次の 5 つの方法により改善された。①「緩衝材としての映画」をタスクに取り入れ、参加者のメディア・リテラシーと異文化リテラシーを養成した点（吉村・宮副 2005, 2009）、②参加者の交信データに参加者全員がアクセス可能（公開性）（吉村・宮副 2005, 2009）、③参加者は特定のグループ内で交信を行う（宛名性）（吉村・宮副 2005, 2009）、④協働的活動と個別的活動の組み合わせによる「言語の社会化」の促進（宮副 2008）、⑤IT 利用の BL の有効性（宮副・鹿目 2009）。
- (3) 言語習得理論を補完するものとして「言語の社会化」の視座を導入したことで、IT 利用の遠隔接触場面における言語使用の実態を明らかにした。CMC テクストの内容分析の結果、次の 4 点が明らかになった。①映画の内容にからめて、参加者は自己開示を行っている（緩衝材としての映画の機能）。②参加者は映像メディアとしての映画をオーディエンスとして読み取り、映画の中に構成された「現実」や文化観について、双方向的な「内容の交渉」（宮副・吉村 2005, 宮副 2008）を経て討論を深めている（メディア・リテラシー）。③参加者の文化的ステレオタイプは更新される場合と強化される場合がある（異文化リテラシー）（宮副他 2009）。④CMC テクストから参加者は映画の内容についてのメッセージに加え、メタメッセージ（情意、親密さ、連帯意識、アイデンティティ・・・）も伝え合っている（異文化リテラシー）（Gumperz 1982; 宮副 2003, 2005）。
- (4) 参加者は互いの異なる属性を越えて社会化を推進する異文化リテラシーを身につけた。同時に、参加者の多文化・多言語意識、言語の実際使用、学習、教育にかかわるビリーフに変容が見られた。主な考察結果は次の 4 点である。①参加者は日本語をリンガフランカとして課題を達成する過程で、それぞれが第一言語による社会化（L1 socialization）、第二言語・外国語による社会化（L2/FL socialization）を、双方向的かつ協働的に進めている（宮副 2008）。②JNNS（日本語非母語話者）/ JNNT（日本語非母語

話者教師) と JNS(日本語母語話者)/JNT(日本語母語話者教師) は、自らをそれぞれ非母語話者、母語話者と固定的に位置づけるのではなく、日本語スピーチ・コミュニティのメンバーとして対等に討論に参加することの意義と自己効力感を体験した(言語アイデンティティ、言語ビリーフ)(宮副・鹿目 2009)。③参加者は属性を意識しながらも差異を超えることが、言語の実際使用と異文化理解に重要であることに気づいた(異文化リテラシー、多文化・多言語意識)(吉村・宮副 2009)。④参加者は言語の学習・教育の方法として、映画の利用の有効性、BL の有効性を高く評価した(メディア・リテラシー、IT 利用の言語の学習・教育)(宮副・鹿目 2009)。

(5) 今後の課題

次の3点が、今後の課題として挙げられる。

- ①映画の選択により、参加のばらつきを是正し、全員が対等勝公平に参加できる方策を探る。
- ②ヴァーチャル映画討論会の実践を継続して行い、言語の社会化にかかわる新たな研究課題を設定し、分析と考察を行う。
- ③日本語以外の言語(多言語)で製作された映画を用い、メールやスカイプ会議での使用言語も多言語化することで、多様な背景の参加者がどのように参加し、言語の社会化を推し進めるのかを調査分析する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

- ①宮副ウオン裕子(2009)「広義の言語教育

評価を考える」『言語教育評価研究』1号、62-72。(招待講演論文)

- ②宮副ウオン裕子・吉村弓子・鹿目葉子(2009)「国際間ヴァーチャル映画討論会の活動とその評価ー日本語教育・異文化コミュニケーション、日本語教師養成教育への示唆ー」小川正志他(編)『アジア・オセアニア地域における多文化共生社会と日本語教育・日本研究』香港大学現代語言及文化学部日本研究学科・香港日本語教育研究会。pp. 358-365。(査読:有)

- ③吉村弓子・宮副ウオン裕子(2009)「日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批評交換 - 異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割 - 」『北海道言語文化研究』7号 pp. 29-40。(査読:有)

- ④宮副ウオン裕子(2007)「多言語スピーチ・コミュニティ香港の日本語の学習・教育ー Cultures, Connections, Communities からの一考察」『日本語教育』133号, 38-45。(寄稿)

[学会発表](計7件)

- ①宮副ウオン裕子・鹿目葉子(2009)「国際間ヴァーチャル映画討論会」における参加者の学びー日本語教師養成課程の院生へのインタビュー調査からー」日本 e-Learning 学会 2009 年国際シンポジウム(法政大学 2009 年 3 月 12 日-13 日)『論文集』(電子版)(査読:有)

- ②宮副ウオン裕子(2008)「国際間ヴァーチャル映画討論会活動における多文化・多言語意識の変容ー5年間の実践と振り返りー」(日本語教育国際研究大会(韓国、釜山外国語大学、2008年7月11日)(査読:有)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮副 ウォン 裕子 (MIYAZOE-WONG YUKO)

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：90424093

(2) 研究分担者

佐々木 倫子 (SASAKI MICHIKO)

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：80178665

(H21 年度から連携研究者に変更)

堀口 純子 (HORIGUCHI SUMIKO)

桜美林大学・言語学系・教授

研究者番号：00052283

(H21 年度から連携研究者に変更)